

レボホリナート点滴静注用25mg「トーワ」
レボホリナート点滴静注用100mg「トーワ」

治療を受けられる 患者さまへ

レボホリナートによる治療方法と副作用

独立行政法人 国立がん研究センター東病院 消化器内科
吉野 孝之



東和薬品株式会社

2010年5月



CONTENTS

はじめに

がんの治療方法に、抗がん剤を使用してがん細胞の増殖を抑えたり、破壊したりする化学療法があります。

化学療法では、抗がん剤の作用を強めるために、複数の薬剤を組み合わせることがあり、その一つがレボホリナートと抗がん剤であるフルオロウラシルの組み合わせです。

レボホリナートそのものは、がん細胞に対する作用はありませんが、フルオロウラシルの抗がん作用を増強することができます。

レボホリナートを使用した化学療法によって十分な効果が得られるよう、治療の際の注意点や副作用の対処法などについてご紹介します。

はじめに	1
レボホリナートの作用	3
治療をはじめる前に 一必ずお読みください	4
レボホリナートによる治療方法	5
レボホリナート・フルオロウラシル療法	5
レボホリナート・フルオロウラシル持続静注併用療法	6
FOLFOX4療法・mFOLFOX6療法	7
FOLFIRI療法	8
主な副作用について	9
食欲不振、吐き気、おう吐	10
口内炎	11
下痢	12
皮膚障害	13
末梢神経障害	14
白血球の減少	15
アレルギー反応	16
こんなときは主治医に連絡を	17

レボホリナートは 抗がん剤の作用を 強めるお薬です。

レボホリナートは、ビタミンB群の一つである葉酸をもとにつくられたお薬です。

レボホリナートにはがん細胞に対する直接の作用はなく、抗がん剤のフルオロウラシルと一緒に使用されます。

フルオロウラシルはがん細胞を成長させる酵素に結合して、増殖を抑える薬剤ですが、レボホリナートと一緒に使うとその結合がさらに強くなるため、抗がん剤の作用が強くなります。

レボホリナートとフルオロウラシルを組み合わせる治療方法は、手術だけでは十分な治療効果が得られない胃がんや大腸がんの場合に行われます。

医師が治療の指針として活用する大腸癌治療ガイドラインでは、大腸がんの手術後の再発予防などに、レボホリナートとフルオロウラシルによる治療が推奨されています。

治療をはじめる前に —必ずお読みください—

レボホリナートによる治療をはじめる前に
以下のような場合は医師や看護師、薬剤師に伝えてください。

- 現在、薬を使用している。
あるいは、最近まで薬を使用していた。

特に、ティーエスワン[®]（一般名：テガフル・ギメラシル・オテラシリカリウム配合剤）あるいはゼローダ[®]（一般名：カベシタビン）というお薬を現在、あるいは過去に飲んでいたことがある場合、副作用が強く現れることがありますので、必ず主治医に伝えましょう。

- 風邪や下痢などで体調が良くない。
- 薬によるアレルギー症状が現れたことがある。
- 肝臓、腎臓、心臓の病気に現在かかっている。
もしくは過去にかかったことがある。
- 将来、子どもがほしいと思っている。
- 妊娠している、あるいは妊娠している可能性がある。
- 授乳中である。

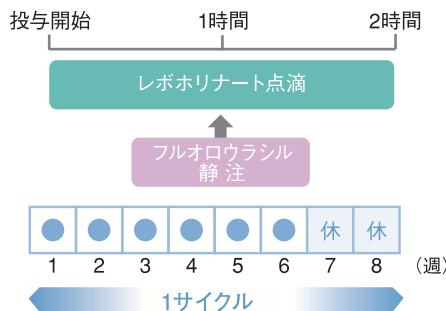
レボホリナートは フルオロウラシルと組み合わせて 注射によって投与します。

レボホリナートとフルオロウラシルを組み合わせた主な治療方法を紹介します。

投与方法は患者さんの状態などに合わせて調整されます。

レボホリナート・フルオロウラシル療法

胃がん、または大腸がんに用いられる治療方法です。

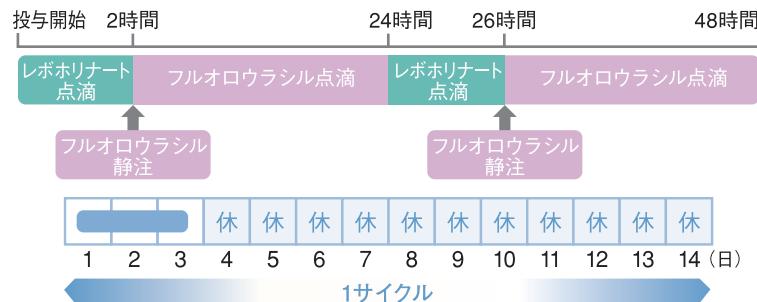


▶ 1週間に1回ずつ治療を行い6週間続けた後に2週間休む
8週間を1コースとして繰り返します。

レボホリナート・フルオロウラシル持続静注併用療法

大腸がんに用いられる治療方法です。

1. LV5FU2 療法(De Gramont 療法)



▶ 1回の治療には約3日間かかります。この治療を2週間に1回行います。

2. sLV5FU2 療法



▶ 1回の治療には約3日間かかります。この治療を2週間に1回行います。

FOLFOX4 療法・mFOLFOX6 療法

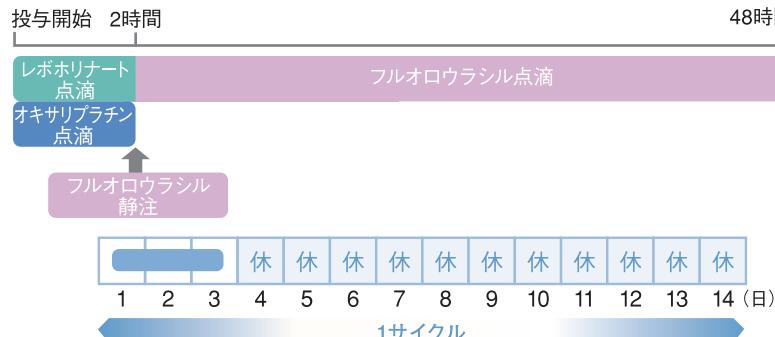
大腸がんに用いられる治療方法です。フルオロウラシルとは作用が異なる抗がん剤のオキサリプラチニを追加して投与します。

1. FOLFOX4 療法



▶ 1回の治療には約3日間かかります。この治療を2週間に1回行います。

2. mFOLFOX6 療法



▶ 1回の治療には約3日間かかります。この治療を2週間に1回行います。

FOLFIRI 療法

大腸がんに用いられる治療方法です。フルオロウラシルとは作用が異なる抗がん剤のイリノテカンを追加して投与します。



▶ 1回の治療には約3日間かかります。この治療を2週間に1回行います。

主な副作用と 対処法について 知っておきましょう。

レボホリナートとフルオロウラシルによる治療では、がん細胞だけでなく正常な細胞も影響を受けるため、治療中はさまざまな症状が副作用としてあらわれることがあります。

ここでは、主な副作用とその対処法をご紹介します。

副作用の起こりやすさには個人差があり、抗がん剤の種類によっても違います。

症状ができるだけ軽くし、治療を効果的に継続するためにも、予測される副作用の症状や対処法について知っておくことが大切です。

気になる症状があらわれた場合は、医師や看護師、薬剤師に相談しましょう。

食欲不振、吐き気、おう吐

治療中には、抗がん剤による脳への刺激や精神的ストレスなどさまざまな原因で食欲が低下してしまうことがあります。また、消化管粘膜や脳が刺激されることによって、吐き気やおう吐が起こることがあります。治療に対する緊張や不安などが吐き気の原因となる場合もあります。

●対処法・生活上の注意

吐き気のあるときには無理をせず、調子の良いときに、食べられるものを少しずつでも食べるようにしましょう。においの強い料理は避け、ゆっくりかむように心がけます。食べられないときでも、水分は摂取することが大切です。

症状に合わせて吐き気止めの薬（制吐剤）が使われることもあります。

※ オキサリプラチンまたはイリノテカンを併用する治療では症状が起こる可能性が高まります。



口内炎

口の粘膜が刺激され、炎症が起こることがあります。唾液の量が減少し、口の中が乾燥すると、粘膜がより傷つきやすい状態になってしまいます。

●対処法・生活上の注意

うがいや、刺激の少ない歯ブラシを使った歯みがきなどで、口の中を清潔に保ちましょう。抗がん剤治療開始前に、歯や口腔内の状態をチェックしてもらい、虫歯や歯肉炎は治療しておくようにしましょう。水分をとって口の中を乾燥させないことも大切です。刺激の強い食品、お酒やたばこはひかえましょう。



下痢

消化管の粘膜が損傷を受けると下痢が起こることがあります。長く続くと体内の水分や電解質（カリウムなど）が不足しやすくなり、体力を低下させます。

●対処法・生活上の注意

脱水症状を起こさないよう、水分を少しづつこまめにとりましょう。水だけでなく、スポーツドリンクなどで電解質を補給することも重要です。下痢がひどいときは牛乳やかんきつ系のジュースはひかえたほうがよいでしょう。食べられる状態になったら、低脂肪・高たんぱくの食事で栄養を補うようにします。水分を摂取できない状態のときはすぐに医師や看護師、薬剤師に相談してください。

※ オキサリプラチンまたはイリノテカンを併用する治療では症状が起こる可能性が高まります。



皮膚障害（発疹、色素沈着など）

手足に発疹や赤み、ヒリヒリした感覚があらわれることがあります。また、新陳代謝が抑制されることで皮膚や指先、爪が黒っぽくなることがあります。これらの症状は日焼けや乾燥によって強くなる場合があります。

●対処法・生活上の注意

外出時は帽子や衣類で直射日光を防ぐようにしましょう。保湿クリームやステロイド外用剤を塗ることで症状が軽くなることもあります。塗り薬は刺激の少ないものを選ぶことが大切です。医師や看護師、薬剤師に相談しましょう。



末梢神経障害（しびれ・感覚異常など）

手足や口のまわりにしびれや痛みがあらわれたり、のどがしめつけられるように感じられることがあります。また、手足の感覚が鈍くなったり、違和感があらわれることがあります。

●対処法・生活上の注意

手足や口がしびれているときは冷たい空気に当たらないようにし、氷や冷たい飲み物はひかえてください。手足の感覚がにぶくなっているときは、転倒防止のため、底の厚い靴を避けましょう。家事などで火や包丁を使うときは特に注意して作業する必要があります。

※ オキサリプラチンを併用する治療で起こる可能性が高い症状です。



白血球の減少

抗がん剤の作用により骨髄の造血機能が低下し、白血球が減少することがあります。白血球が減少すること自覚症状はありませんが、身体の抵抗力が低下し、感染症にかかりやすくなります。感染症にかかると、38℃以上の発熱、寒気、せき、のどの痛み、腹痛などの症状があらわれます。

●対処法・生活上の注意

日常生活において、感染症予防を心がけることが大切です。人混みを避ける、手洗い・うがいを習慣づけるなど、注意をしましょう。

感染症にかかったときは、抗生素による治療を行います。白血球が著しく減少している場合は、白血球を増やす薬剤を投与することができます。

※ オキサリプラチンまたはイリノテカンを併用する治療では白血球の減少が起こる可能性が高まります。



アレルギー反応（ショック）

抗がん剤の投与中や投与後すぐに、アレルギー反応として過敏症の症状（ショック症状）があらわれることがあります。点滴中または点滴が終った後に、呼吸がしづらい、皮膚が赤い、体がかゆいなどの症状があらわれたら、すぐに医師か看護師に伝えてください。以前に薬や注射によるアレルギー反応を起こしたことのあるかたは、治療の前に必ず医師や看護師、薬剤師に伝えてください。

※ オキサリプラチンを併用する治療ではアレルギー反応が起こる可能性が高まります。



こんなときは 主治医に連絡を

次のような症状がみられるときや、
少しでも不安がある場合は、
医師や看護師、薬剤師に連絡してください。

吐き気やおう吐が
長く続いて
食事がとれない。

口内炎がひどく
食事がとれない。

下痢がひどく、
回数の増加
(1日3回以上)や
水様便がみられる。

38°C以上の
熱がある。